研究経過報告書

令和２　年　10　月　５日

研　究　員 （留学者）	所属　法学部　　職　准教授　　氏名　利根（吉田）　有紀
派 遣 期 間	令和２　年　４　月　１　日　～　令和２　年　９　月　30　日
研究主題等	16世紀イギリス文学における中世的伝統の研究 ―William Shakespeare作*Pericles*にみられる道徳観―
報 告 事 項	（研究活動の概要、内容、成果等、添付書類の見出し等） 【研究活動の概要】 　在外研修期間中は、慶應義塾大学文学部に訪問准教授として受け入れていただいた。しかし、コロナウイルス感染拡大の影響で大学図書館での文献収集等の活動ができなかったため、当初予定していた関連文献・一次資料収集を主とする研究手法を変更し、４月頭から７月半ばにかけては、手持ちの資料及び*Pericles*のテキスト分析を中心に研究を行った。（下記【研究活動の内容】の①参照） 　その後、慶應義塾大学の図書館が予約制・短時間（一時間以内）の利用という制限付きではあるものの閲覧等の利用ができるようになったため、予定していた一次資料を含む関連文献の収集・分析を行った。（下記【研究活動の内容】の②と③参照） 【研究活動の内容・成果等】 　数あるShakespeare作品から*Pericles*を研究対象に取り上げた一番の理由は、非常に教訓的で型にはまった説教調のコーラスとそのコーラスを除くメインテキストの決して教訓的とは言えない、しかし豊かな物語性を含むストーリー展開との齟齬に違和感を抱いたことにある。このような違和感を劇作上の欠点とみなすこともできるが、私はむしろ、この作品の劇作術を読み解く手がかりになると考えた。*Pericles*が、単に教訓的な話を観客に伝えることを目的に書かれた中世道徳劇のような教訓劇とは、異なる意図をもって創作されたと推測したのである。学外派遣中の研究では、その創作意図が

何であるか、また、この作品から読み取れるShakespeareの道徳観を伝統的な道徳劇との違いから明らかにすることを目指した。その際*Pericles*の種本の作者でありながら、*Pericles*のコーラス役として劇中に登場し、メインテキストのストーリーを教訓的に解説する役目を与えられた中世の詩人John Gowerにも注目し、Shakespeare時代の観客がGowerと彼の作品（特に*Pericles*の種本である*Confessio Amantis*)に抱いていたと考えられるイメージを明らかにし、そのイメージを利用した劇効果を検証することも必要であると考えた。

以上のような研究目的を達成するために行った具体的な研究内容は次の通りである。

①研究対象であるShakespeare作（近年の研究では、Shakespeareと他の劇作家との共作とする説が有力である）*Pericles*のテキストとこの作品の種本と考えられているJohn Gower作*Confessio Amantis*第8巻に収められたTyreのApolloniusの物語を比較し、特にその相違点について考察した。なお*Pericles*のテキストについては、Arden版、Oxford版、New Cambridge版等、複数のテキストを参照した。これは*Pericles*の初版であるQuarto版には矛盾点が多く、各テキストの注釈を比較するためでもある。さらに、各版の編者がテキストの校訂のために参考にしたと考えられる*Confessio Amantis*以外の種本や、*Pericles*の上演後に書かれ、*Pericles*の上演記録の代わりになるとも考えられているGeorge Wilkins作の物語*The Painful Adventure of Pericles Prince of Tyre*も、*Pericles*の独自性を明らかにするための資料として参照・分析した。

結果、*Pericles*は、*Confessio Amantis*では一体となっている二つの要素をあえてメインテキストとコーラスに分けて提示しているのではないかという仮説をたてるに至った。その二つの要素とはすなわち、舞台上に視覚的に提示される劇世界とそれを教訓話として読み解いてみせるGowerのコーラスである。種本では、作者の教訓的な視点が最初から物語に組み込まれている。そのため読者は、教訓話の枠組みを忘れてストーリーをたどることが難しい。一方*Pericles*では、各幕間に挿し込まれたGowerのコーラスで道徳的な解釈が行わ

れる一方、舞台上で役者たちによって演じられる劇世界は、ある程度観客が自由に解釈する余地を残している。これは一つには、過去からよみがえったGowerが自作の物語が上演されているのを見るというこの作品の趣向から生まれた、劇中世界とGowerの間の時間軸におけるある種の距離感が可能にしたものと推測できる。

　このように考えると、メインテキストとGowerのコーラスの間に齟齬があると感じるのは、観客が劇中世界を道徳劇の枠組みにとらわれない解釈をした場合であり、中世の伝統的な道徳劇になじんだShakespeare時代の観客にとってはむしろ、Gowerの教訓的な解釈は自身の解釈と一致した、違和感のないものであった可能性もあると思い至った。

②Shakespeare作品を彼の道徳観という観点から分析した文献を読み、先行研究の概要を把握した。意外にも、*Pericles*を14世紀以来Shakespeareの時代まで続く道徳劇の伝統、あるいは教訓劇と関連付ける研究はそれほど多くはないことが判明した。またShakespeareの道道観について論じる先行研究の中でも、*Pericles*を扱うものは少なかった。

③Early English Books Onlineを利用して、Shakespeareの時代に書かれた文書の中からGowerに関する記述を見つけ出し、詩人Gowerに対して当時の人々が持っていたと考えられるイメージと彼の作品に対する評価を探った。ProQuest社が提供するEarly English Books Online (EEBO)は、1475年から1700年の間に英語で出版された書籍あるいは英国で出版された書籍をデジタル化して提供するデータベースで、キーワードを入力するとその単語を含む書物を簡単に探し出すことができる。幸い慶應義塾大学はProQuest社と契約しておりEEBOの利用が可能であった。

　EEBOでGowerに関連する記述を検索してみると、いくつか興味深いことがわかった。例えば、同時代のGeoffrey Chaucerとともに英国文学の発展に貢献した詩人と評される一方、Chaucerと違い、文学者としての偉大性よりも道徳家としての側面が評価されていたのでは

	と思われる記述があった。（George Puttenham著、*The Arte of English Poesie*(1589)）ShakespeareはChaucerの*Knight's Tale*を種本にして書いた*The Two Noble Kinsmen*でも、種本の作者、すなわちChaucerをコーラスとして登場させるという趣向を採用している。今後の課題として、同じように種本の作者を登場させるという趣向を採用した二つの劇を比較し、道徳家Gowerと偉大な文学者Chaucerというコーラス役の異なるイメージが、それぞれの作品に与える影響を考察する必要があると考えている。 　また、EEBOで一次資料にあたる一方、Shakespeare時代のGower像について論じた以下のような先行研究もあわせて参照したことを記しておきたい。 Ricjard Hillman, “Shakespeare's Gower and Gower's Shakespeare : The Larger Debt of Pericles.” Shakespeare Quarterly 36.4 (1985) Jones, Kelly. ““The Quick and the Dead”: Performing the Poet Gower in Pericles.” Shakespeare and the Middle Ages: Essays on the Performance and Adaptation of the Plays with Medieval Sources or Settings. Eds. Martha W. Driver and Sid Ray. Jefferson: McFarland & Company, Inc. 2009.201-214. 【今後の課題】 今回の研究では、コロナウイルス感染拡大の影響で、学外派遣期間の前半を予定していた資料収集ではなくテキスト研究に費やさざるを得なかったこともあり、上記の研究課題に対して結論を得る段階までには至らなかった。しかし、予定外に行ったテキスト分析という手法により、*Pericles*と種本及び伝統的な道徳劇との違いを考察
	するヒントを得ることができたことは、今後の研究につながる収穫であったと考えている。